10会議｜８人の建築家と２人の建築史家による建築展の考察

芦澤竜一、五十嵐淳、永山祐子、平田晃久、平沼孝啓、藤本壮介、吉村靖孝、五十嵐太郎、倉方俊輔

# 10 process in architecture exhibition

―― これまでの展覧会を振り返りながら、公募で募られた出展者の一世代上の建築家と建築史家により、U-35（以下、本展）を通じたこれからの建築展のあり方と、U-35 の存在を考察する。

## 「10 会議」の発足

16 年前、U-30 として開催を始めた本展。世界の第一線で活躍する巨匠建築家と、出展者の一世代上の建築家が議論を交わし、あらたな建築の価値を批評し共有しようと召集された。巨匠建築家には伊東豊雄。そして一世代上の建築家として、全国の地方区分で影響力を持ちはじめ新たな活動をされていた建築家・史家。東より、北海道の五十嵐淳をはじめ、東北の五十嵐太郎、関東の藤本壮介、関西の平沼孝啓、そして中国地方の三分一博志や、九州地方の塩塚隆生など、中部と四国を除いた、日本の 6 地域から集まった。その後、開催初年度に登壇した三分一、塩塚など 1960 年代生まれの建築家から、開催を重ねるごとに 1970 年代生まれの建築家・史家が中心となる。3 年後の 2012 年には、8 人の建築家（五十嵐淳、石上純也、谷尻誠、平田晃久、平沼孝啓、藤本壮介、2013 年より、芦澤竜一、吉村靖孝、2021 年より、永山祐子）と 2 人の建築史家（五十嵐太郎、倉方俊輔）による現在のメンバーが開催を重ね、3 年が経った。そもそもこの展覧会を起案した平沼が「一世代上」と称した意図は、出展の約 10 年後に過去の出展者の年齢が一世代上がり、世代下の出展者である新時代を考察するような仕組みとなるよう当初に試みたのだが、この 10 名が集まった 4 年目の開催の時期に、藤本が「この建築展は、我らの世代で見守り続け、我らの世代で建築のあり方を変える」という発言から、本展を見守り続けるメンバーとして位置づけられていった。そして同時期に、五十嵐太郎の発案で「建築家の登竜門となるような公募型の展覧会」を目指すようになる。

ここで振り返ると、開催初年度に出展した若手建築家との出会いは開催前年度の 2009 年。長きにわたり大学で教鞭を執る建築家たちによる候補者の情報を得て、独立を果たしたばかりであった全国の若手建築家のアトリエや自宅に出向き、27 組の中から大西麻貴や増田大坪、米澤隆等を代表する出展者 7 組を選出した。その翌年の選出はこの前年の出展者の約半数を指名で残しつつ、自薦による公募を開始するものの、他薦による出展候補者の選考も併用する。はじめて開始した公募による選考は、オーガナイザーを務める平沼が担当し、応募少数であったことから、書類審査による一次選考と、面接による二次選考による二段階審査方式で行った。また海外からの応募もあったことから 2011 年に出展を果たした、デンマーク在住の応募者、加藤＋ヴィクトリアの面接は、平沼の欧州出張中にフィンランドで実施された。また、他薦によるものは、塚本由晴による推薦を得て出展した金野千恵や、西沢大良による海法圭等がいる。つまり 1 年目は完全指名、2 年目の 2011 年からは、前年度出展者からの指名と公募による自薦、プロフェッサー・アーキテクトによる他薦を併用していた。そして、現在の完全公募によるプログラムを実施した

のは、開催 5 年目の 2014 年である。完全公募による審査をはじめた初代・審査委員長を務めた石上が、自らの年齢に近づけ対等な議論が交わせるようにと、展覧会の主題であった U-30 を、U-35 として出展者の年齢を 5 歳上げた時期であり、それから今年の開催で 11 年が経つ。また、この主題の変更に合わせてもう一つ議論されていたアワードの設定（GOLD MEDAL）は、完全公募による選考と出展者の年齢が 35 歳以下となった翌年の開催である 2015 年。つまり公募開催第 2 回目で審査委員長を務めた藤本が、初回のゴールドメダル授与設定に対し、「受賞該当者なし」とした。しかしこのことで大きく景気付けられ、翌年には伊東豊雄自らが選出することによる「伊東賞」が、隔年で設定するアワードとして追加され、それぞれの副賞として翌年の出展者としてシード権を与えられるようになる。振り返れば、タイトルを変えてしまうほどの出展年齢もそうだが、プログラムが徐々にコンポジットし変化し続けているのが、本展のあり方のようだ。

出展者の一世代上の建築家・史家 10 名が一同に揃うシンポジウム後に場を設け、来年、開催 17 年目を迎える今後の U-35 のプログラムから存在のあり方を議論すると共に、ファインアートの美術展のように展覧会自体が発表の主体とならない、発展途上の分野である建築展のあり方を模索する会議を「10 会議」と名づけ、2017 年より開催している。本年、10 年ぶりに審査委員長を務めた藤本壮介、そして来年、2026 年の審査委員長を務めることになる五十嵐淳を中心に、第 9 回目の「10 会議」を開催した。

――― 皆様おつかれさまでございます。例年通り、GOLD MEDAL 授与後、「祝杯のビール」をガマンしていただいて 60 分間。この開催が継続するエンジンのような恒例の「10 会議」をはじめさせていただきます。この会議は、出展者の一世代上の建築家・史家たちが時代と共に位置づけてきたメンバー 10 名が一同に揃ったシンポジウムの開催後に場を設け、次の U-35 のプログラムについて議論すると共に、ファインアートの美術展のように展覧会自体が発表の主体とならない、発展途上の分野である建築展のあり方を模索する会議を「10 会議」と名づけて開催しております。今年の審査委員長を務められた藤本先生、そして来年の審査委員長を務めていただくことになった五十嵐淳先生を中心に、第 9 回目の「10 会議」を開催いたします。開催当時より本展のファウンダーとしてオーガナイザーを務めてくださる平沼先生、本日も進行の補足応答をどうぞよろしくお願いいたします。

（一同）どうぞよろしくお願いいたします！

――― 万博の成功もまた、今年の象徴的な出来事であったと感じています。まずは、出展者の選出から相当苦心され、先ほど GOLD MEDAL を授与された藤本先生に、本年の出展者の選考過程から印象をお伺いさせてください。

藤本：皆さん本当にありがとうございました。いやぁ、、、今年は特に難しすぎましたね（笑）。

一同：（笑）うんうん。

藤本：太郎さんがシンポジウム冒頭で触れられた“ モノをつくらないコト ”を含めて、あれほど多様な建築が集まるとは思わなかった。“ エモい ”とも表現されていましたが、そうした感覚の時代に突入しているのかもしれません。世代の括りを超えて、“ ありとあらゆるもの ”の時代に入ってきた印象も受けました。変化の時代とは、そうした多様性が現れる時代でもあるのでしょう。だからこそ、どんどんこのような場に挑んでほしいと思います。そして田代さんを選んだ理由は先ほど壇上の総評でも話した通りですが、結局のところ僕は、モノができているのが好きなんだなと感じました。秘めたエネルギーというのも素晴らしいのですが、それをモノにする時のエネルギーってまた別のエネルギーを出さなきゃいけない。想いを秘めているだけではモノはできてこないことを考えると、やはりモノにするという行為に対して、勇気をもって一歩踏み出した人を選びたい。工藤さんたちの斜面の家は、その実現に相当なエネルギーを費やしたと思うの

ですが、家自体はできあがっていて、その表現方法としてあの大きい模型をつくるエネルギーを使ったと思うし、空間性も素晴らしかったのですが、ただ、できたモノの表現手法を選んだだけではなく、この U-35 に向けて誠実に新たなモノをつくり出すチャレンジをしたのは田代さんだった。そこを評価したいと思いました。

――― ありがとうございます。なお、来年度より受賞者に対するシード権をなくします。審査委員長を務めていただく五十嵐淳先生より、本日のご感想と来年に向けての展望をお聞かせください。

五十嵐淳：毎年のことですが、選ぶ人によって選ばれる人が変わるのだと、あらためて感じました（笑）。昨年の方がわかりやすかったのかな。藤本さんの方がよりわかりやすいものを選ぶのかと思ったら、実際に選ばれたのは意外にもそうではなかったということに驚きました（笑）。そして今日のシンポジウムの印象としては、例えば成定さんに、アートに行くのか建築に行くのか、と問う必要はないのかなと思っていて、大谷翔平のように二刀流でいく人が建築界にも現れてほしいと思いました。

――― そして、2021 年に審査委員長を務められた吉村先生からディレクション方式を導入いただき、選出後の出展者説明会の日に展示エスキースを行うということを、芦澤先生、平沼先生、永山先生と続けていただきました。4 年間で展示の内容にも大きな変化が見られました。

藤本：すみません、今年の出展へは特に何もせず、そのままで臨みました（笑）。

平沼：あはは（笑）。でも出展者の意識としてはしっかり働いていたと思いますし、それが表れてよかったのではないでしょうか。

吉村：そうですね。今年の出展者の皆さんは全体的に、若くて混沌としている中で、わかり難さ、わからなさをそのままプレゼンテーションしているような感じを受けました。それが初期の U-35 を思い出すのです。ここ数年、展示内容が整ってきていた印象がありましたが、ある意味、原点に返り、またエスキースの必要性も感じとれました。

芦澤：皆さんが手探り状態で取り組んでいる印象でしたね。若いからこその迷いや未完成さがあり、それはそれで魅力的なのですが、やっぱり…ね（笑）。

藤本：（笑）そう、今回のようにあまりにふわふわしているのをずっと愛でていてもよくない。正直なところ、そうした難しさもあります。ただ 7 組全て、毎年完成してる人が出てくるかというとそれも難しいところですね。

平沼：昨年は出展者同士が自然に交流していましたが、今年は少し距離を感じました。決して仲が悪いということではないのですが、YouTube 上でのエスキース会の様子を見ていても、どこか距離感がある印象だったのです。昨年までの 4 年間はチームとしての団結が感じられたのですが、今年は少し様子が異なっていました。全体的にあまり親密な印象までは感じとれなかった。

藤本：方向性がバラバラすぎて、互いにコメントしづらかったのかもしれませんね。

平沼：一見、否定的な意見が出にくく、いいね！という形で終わってしまう傾向でもあったように思いましたが、この後の懇親会でフツフツと秘められた想いを聞き出してあげたいと思います。

倉方：そうね。そこはやはり、上の世代が少し入ることで議論が活性化するのかもしれません。結果的に万博の施設をつくられた 20 組も非常に仲良くなっていましたものね。

藤本：すみません、その点は確かに反省すべきですね。

平沼：いえ、実際は仲が良いのかもしれません（笑）。

永山：昨年は、エスキース会から引っ張る人が現れましたよね。

藤本：しかし、独自性を持つということで、それぞれが一つの方向しか見えなくなってしまうという懸念もあります。まさに、アート気質な人たちの集まりという印象でした。やはり来年は審査委員長がしっかりエスキース会に入り、ディレクションを行うことが大切だと思わされました（笑）。

五十嵐淳：あまり得意ではないのですが（笑）がんばります！

五十嵐太郎：今回の展示では、建築の姿が見えないモノが複数あったことに非常に驚きました。実作がないのであれば、そういう展示の方法も理解できますが、実際に建築をつくっているにも関わらず、その姿をあえて見せないという写真による表現もありました。まぁ、思い切りが良いというか…。既存の建築メディアへの鋭い批評にはなっているけれど、少しもったいない気もしました。シンポジウムで話を聞いた方は、意図を理解できたかもしれませんが、そうでない方には少し謎が残ったのではないかと思います。

倉方：そうですね。内容としては、それぞれ意思が表明されているし、多様だし、未来を切り拓くモノになっていたと思います。ただ、もう少し言葉で語ってほしいと感じました。少なからず意思表明しないと、せっかくのシンポジウムという場で、議論や観客と繋がる機会があるのですから、物足りなく感じてしまいます。

藤本：倉方さんが、今日は珍しくかなり煽っていました。確かに発言がなかったですよね。（笑）

倉方：そうですね（笑）。発言が少なくてちょっとマズイなと思ったのです。せっかくの機会なので、もう少し積極的に発言して、自分が GOLD MEDAL を獲りたいとか、自分の考えを主張してほしかったですね。だから年長者が入ってエスキース会で否定的な意見を交わすことも、自己理解を深める良い機会になると思います。やはりそうした場を設けることで、より成熟した議論が生まれるのではないでしょうか。

平田：形が見えないということもありましたが、実際にはそれぞれの形をつくっていて、形をつくっていないのは成定さんくらいだったと思いました。そのため、それをどのように読み解くか、あるいは僕らが建築と捉えているものとは異なるものが、新たな建築として立ち現れてくることを、良く言えば、予感させる展示であったようにも思います。もっとも、そう簡単にはいかないだろうと思っているところもあります。やはり丹下健三さん以来、日本の建築で長く試みられてきた建築における構造主義的なものとは異なったとしても、何らかの構造性あるいは何らかの型のようなものは必要であるように思います。ただし、現段階ではまだ言い切れる段階に至っていないのかもしれません。しかしながら、その段階に至っていないからこそ、語りだけはフライングしているような人がいた方が、より面白くなるのではないかとも感じました。

永山：やはり世代的な違いというものは少なからず感じましたね。よくよく見ると、出展者の皆さんは、私たちの子供に近い年齢層の方々です。今の若い世代は、YouTube や SNS、TikTok などから常に流れてくる個人的ナラティブを、まるで蛇口を開けっぱなしにしているように浴び続けている世代だと思います。そのため、時系列に沿って滑らかに流れ続け、思考が立ち止まらな

いような感覚があります。いつか勇気をもって切断しなければならないと思うのですが、すなわち型に落とし込むことへの違和感がある世代なのではないかと感じました。少し雰囲気が違うんですね。ただし、そのような世代だからこそできる新しい止め方、型のつくり方、構造のあり方というものが生まれてくるのだと思います。そうでなければ建築にはならないので（笑）、出てくるとは思うのですが、そこに違いを感じました。それからすごく繊細な事象への興味があって、個人的ナラティブを湯水のように受け取りながらも、常にコレクティブな世界の中に身を置くという前提があるからではないかと思うのですが、私の子供もほとんどテレビを見ません。面白くない、と言うのです。大衆に向けられたコンテンツには惹かれず、むしろ誰かが、ちょっと踊ってみた、といった個人的な動画を一日中見ています。私からすると「何が面白いのだろう」と思ってしまうのですが、彼らにとってはそれが等身大のリアルなんですよね。つまり、自分と同じ場所に立っているリアルに隣にいる人の話の方が聞きたいという感覚であり、有名人よりもYouTuber の方に親近感と興奮を覚えるようです。そういう新しい価値観と世代の人々が、現代社会のリアルを何に感じているのか…。

五十嵐淳：それぞれの人に、それぞれのコルビュジエがいるようなものですね。今の若者や子どもたちには。信者が一人しかいないコルビュジエもいるけれど、その人にとっては確かに神なんだよね。

藤本：それぞれのコルビュジエですね。

吉村：各事務所のスタッフにもそういうことを感じますか？

藤本：うちのスタッフは少し違うかもしれません。うちに来るくらいですから、やはり建築を信じている人たちです。ただ、確かにここ 2-3 年、新卒者の中に、何を考えているのか掴みづらい、ふわふわとした印象の人もいるように思います（笑）。
五十嵐淳：まぁ、2000 年以降に生まれた世代ですからね（笑）。

永山：（笑）これからどうなっていくのでしょうね。私の子供世代、さらにその下の世代になると、全く異なる世界になるのではないかという予感が働いてしまいます。世代間にはグラデーションがあると思いますが、今はその途中を見ているような感覚。つまり大前提として、価値観の異なる世代が共存しているということですね。

平沼：ただ、今年の建築学生ワークショップに参加した学生を見て感じたことですが、あのような場に応募してくるだけあってエース級の人たちなのでしょう。際どい側面も当然持たれていますが、彼女らは、1 等を取りたいという意識を強く持っていました。

倉方：そうね、あれはグループでの取り組みだからこそグループ同士のナラティブが生まれているのかな、と思います。個人では生まれないものが、集団では生まれる。その表裏一体の関係なのだと思います。

五十嵐淳：しかし卒業設計展やアイデアコンペに出してくる学生たちは絶対に勝ちたい人ばかりですよね。そういう人たちは今、どこに消えたのでしょうか。

藤本：ワハハ（笑）。本当にどこかへ行ってしまいましたね。

平沼：設計事務所の今では、規模が大きい企業ほど、昨今の働き方改革の影響から残業させてあげられないと聞きます。学生のうちは、徹底的に頑張れ！と言われるけれど、会社に入ると、そこまで頑張るな、とも人によっては聞こえてしまうのでしょう。

永山：それはかわいそうですね。

平沼：ダブルワークしている人や積極的にコンペを撃っている人は意欲を保っているのでしょうが、そうでない人は競わず、徐々にやる気を失っていく現状も否めない。

藤本：確かに、今年の出展者にはあまり勝負への執着が感じられませんでしたね。

平沼：そうですね、内なる牙を秘めて表に出さなかっただけなのかもしれませんが（笑）。

永山：（笑）いや、異種格闘技のような状況だったので、どう進めばいいか戸惑っていたのかもしれません。成定さんのフェミニズムに関する問題提起についても、最近アートの審査をしていると 1-2 点入ってくるので、同じ傾向を感じます。以前は敢えて言わなかったテーマが、社会ソーシャルイシューとして、近年ではあっけらかんと取り上げられるようになってきました。私自身もそうでしたので、母親世代とは違うということに社会に出てから気づくという感覚には共感します。今、フェミニズムという問題が続いてあるなと、ようやくリアルになってきて、その意味では新鮮に反応している感じがして、今の社会を映し出す展覧会のようで面白かったです。

——— 2017 年に第 1 回の 10 会議が発足し、本展のあり方を議論する中で、出展者の選出方法として「推薦枠」と「公募枠」の 2 枠を設けました。また、2019 年の開催時には、GOLD MEDAL 賞を受賞された秋吉さんから、「若手の出展者自身が同世代の存在をよく知っている」との助言をいただいたことから、今年も出展者の皆さまから 2-3 名の推薦リストを提出いただき、それを参考に選出いただきました。9 名による選出の簡単なご紹介を、まず五十嵐太郎先生よりお願いいたします。（1990 年 4 月生まれ以降の方が応募可能・2026 年 3 月末日時点で 35 歳以下）

【2026 年推薦】審査委員長：五十嵐淳

| | |
|---|---|
| 01. 五十嵐太郎 | ●佐藤熊弥｜tandem |
| 02. 倉方俊輔 | ●下田悠太｜Biomatter Lab |
| 03. 芦澤竜一 | ○不選出 |
| 04. 五十嵐淳 | ○2026 年 審査委員長のため不選出 |
| 05. 永山祐子 | ●ボウアヤド・ガリ｜YOKOMAE et BOUAYAD |
| 06. 平田晃久 | ○不選出 |
| 07. 平沼孝啓 | ●田代夢々 ｜ateliers mumu tashiro |
| 08. 藤本壮介 | ●萩尾凌＋塚本安優実 ｜toge toge |
| 09. 吉村靖孝 | ●持井英敬｜オーロラソース |

【2025 年推薦】審査委員長：藤本壮介

| | |
|---|---|
| | ●上野辰太朗 |
| | ●房川修英＋石田雄琉｜Brain Sauce Studio |
| | ●田代夢々 ｜ateliers mumu tashiro |
| | ●グリアー・ハナ・ハヤカワ｜アキ・アーキテクツ |
| | ●下田直彦｜カナバカリズ |
| | ●大須賀嵩幸｜リトー建築研究室 |
| | ●成定由香沙｜Studio Yukasa Narisada |
| | ○2025 年 審査委員長のため不選出 |
| | ●下寺孝典｜TAIYA |

【2024 年推薦】審査委員長：永山祐子

| | |
|---|---|
| 01. 五十嵐太郎 | ●井上岳｜GROUP |
| 02. 倉方俊輔 | ●山田貴仁＋犬童伸浩｜Studio Anettai |
| 03. 芦澤竜一 | ●西尾耀輔＋片野晃輔 ｜veig |
| 04. 五十嵐淳 | ●石黒泰司｜ambientdesigns |
| 05. 永山祐子 | ●石村大輔＋根市拓｜石村根市 |
| 06. 平田晃久 | ○2024 年 審査委員長のため不選出 |
| 07. 平沼孝啓 | ●守谷僚泰＋池田美月｜OBJECTAL ARCHITECTS |
| 08. 藤本壮介 | ●加藤麻帆＋物井由香｜加藤物井 |
| 09. 吉村靖孝 | ●山川陸｜山川陸設計 |

【2023 年推薦】審査委員長：平沼孝啓

| | |
|---|---|
| | ●福留愛｜iii architects |
| | ●大村高広｜GROUP |
| | ●大野宏｜Studio on site |
| | ●竹内吉彦｜t デ |
| | ●久米貴大｜Bangkok Tokyo Architecture |
| | ●笹田侑志｜ULTRA STUDIO |
| | ○2023 年 審査委員長のため不選出 |
| | ●小林広美｜Studio mikke |
| | ●小田切駿＋瀬尾憲司＋渡辺瑞帆｜ガラージュ |

上記の他薦・推薦枠より 1-6 組、自薦・公募枠により 1-6 組、

●推薦枠・公募枠による選出数は、当年の審査委員長・選出数による。

五十嵐太郎：今回、いただいていたリストの中に知っている名前があったので、佐藤熊弥さんを推薦しました。彼は西澤徹夫さんの事務所に在籍していたとき、窓学に関する展覧会で会場デザインを担当し、実質的に設計を担っていた人物です。もともとは東京藝術大学の油画専攻の出身で、建築ではなく美術を学ばれていました。そこで藝大の杉戸洋さんという画家の影響を受けたのではないかと思います。杉戸さんも青木淳さんとともにあいちトリエンナーレ 2013 で空間をつくりあげるなど、空間への感性を持つ方です。その影響を受けて佐藤さんも建築に関心を持ち、西澤さんのもとに入られたという経緯があるそうです。私も監修した展覧会で会場デザインをしてもらったことがあり、推薦しました。

倉方：下田悠太さんです。直接の面識はありませんが、特に、構造を媒介としてファッションなど他分野と繋ごうとしている点が面白いと感じています。建築と他領域を区切るのではなく、むしろ構造という概念で軽やかに横断していこうとする姿勢に惹かれました。折り紙構造のようなものをデザインし、それを服の構成へと展開するなど、領域をまたぐ実験的な取り組みをされています。

永山：ボウアヤド・ガリさんです。海外で活躍されている方々で、日本人と外国人のペアで活動されているという点にも新鮮さを感じました。海外の視点から日本を見つめるような活動が展開されているので、より多層的な議論が生まれると思い、推薦しました。

平沼：田代夢々さんです。皆さんにもおそらく送られていてご覧になっている方もいると思うのですが、7 月頃に雑誌が送られてきて、あの青い扉についての記述をじっくり読ませていただきました。扉一枚を通して可能性を探るという発想が非常に面白いと感じて、連続にはなりますが候補に挙げてみるのも良いのではないかと選出しました。35 歳以下であれば何度も挑戦されるといいのではないかと思っていたところ、まさかの GOLD MEDAL 受賞となったのです（笑）。

藤本：（笑）なるほど。僕は、togetoge の萩尾凌さんと塚本安優実さんです。今年の選出では、結果的に推薦枠から多く選ぶことになったのですが、やはり推薦枠の方が圧倒的に力があって、そのあたりにジレンマを感じていました。僕たちが知らない実力者もたくさんおられると思うので、是非、若い皆様に公募で応募してきてもらいたいです。

吉村：本当にそうですよね。僕は持井英敬さんです。昨年に引き続き小さなスケールで丁寧にものづくりをしている方を推薦しました。お茶室のような小規模の建築を手がけておられる方なのですが、この方が良いと思い、選出しました。

―― 皆様ありがとうございました。それでは、来年の出展者 7 組を審査委員長・五十嵐淳先生にご選出いただきます。締め切りの翌日に資料をお送りしますので、翌週、平沼先生が五十嵐淳先生の事務所にお伺いしてインタビューをしながらご決定をいただきます。

五十嵐淳：平沼さん、札幌で何が食べたいですか？

平沼：ジンギスカンがいいです！北海道へ藤本さんも参加されますか？

藤本：おぉ！いいですね、ぜひぜひ行きましょう。

一同：（笑）

――― それでは最後の議題に移ります。ここ大阪を開催地とし、本展と関係の深い万博が無事閉幕しました。会場内の小規模施設をつくるにあたり、吉村先生、平田先生、そして藤本先生がコンペにて本展の出展者を含む若手建築家の皆さま 20 組を選定され、また、平田先生、永山先生、平沼先生も全体調整を担われたり、パビリオンや施設をつくられました。まずは藤本先生より、'70 年より受け継がれた日本国際博覧会を、どのように建築の博覧会として計画され、また何が得られたのかについて、お話しいただけますでしょうか。

藤本：あらためて皆さん、本当にありがとうございました。

一同：ありがとうございます。本当にお疲れ様でした！

藤本：あらためて建築というものは、本当に凄いなと感じました。目の前に建築が現れた瞬間に全てが伝わるのが建築なんだな、と思えたことが本当にありがたかったです。一生をかけてやる価値のある仕事だなと思いましたし、また小規模施設に選出した若い世代がコケながら（笑）必死に頑張っていた姿も印象的でした。ある意味、上世代が無理に引っ張り出した感じもありましたが、厳しい状況の中でめちゃくちゃ逞しくなったと思います。彼らも様々なことを考えただろうし、いろいろな批判を浴びながらも、信念を持って最後までやり遂げてくれました。オープンしてからは、トイレのドアが開かないとか（笑）、更なる試練が待ち受けていたのですが、それも含めて建築だったと感じています。

一同：（大笑）

藤本：また今日のシンポジウムでの話と繋がりますが、やはり建築というのは、そこに人が集まり、使い始めた瞬間に命が宿るのだと実感しました。僕たち設計者の想定をはるかに超え、同じく建築物そのものも僕たちの想像を超える高みへと到達する。社会に対して心底信頼して誠実に建築を社会へ受け渡すことができるのか。その腹の括り方を体感できたことが、素晴らしかったと思います。

――― それでは最後に、U-35 という建築家への登竜門と言われる本展を目指す若手や学生、子供たちなど後進に向けて、メッセージをお聞かせください。

平沼：一昨年、推薦枠で選出され出展されたガラージュは全力を尽くすもアワードを逃し、翌年となる昨年、公募枠で再応募され選出に至り、見事 GOLD MEDAL を受賞されました。決して 1 度の応募や出展で諦めてしまわないで、出展経験者も 35 歳以下であれば、何度でも挑戦をしてきてほしいです。

平田：本当ですね。審査委員長が変われば選出基準も変わりますので、何度も挑戦することが本当に大事です。そして僕らが若い世代に対して持っている評価や見方を吹き飛ばしてくれるような方たちにも臨んでほしいです。

倉方：そうですね。応募しようと準備すること自体が、自分を見つめ直す機会になります。1 度目より 2 度目の方がよりクリアに見えてくることから、何度もトライを重ねていくことが自身の成長に繋がります。実際に出展されれば批判を受けて落ち込むこともあるでしょうが、そこに全力を尽くそうと飛び込んでみることこそが若さの特権です。ぜひ何度でも応募し、挑戦し続けてほしいと思います。

五十嵐淳：これまでの出展者は割と学歴や実績がある方が多い傾向ですが、“こんなのがいたのか！”というような、強い意志、雑草魂を持つ人が混ざってくるのを見てみたいよね（笑）。

芦澤：（笑）特に今年はいろんなタイプの人が選ばれて良かったと思いましたが、全体的にみると少し弱々しい感じもして、この場を原動力にするパワフルな人に出てきてほしいですね。

五十嵐太郎：同じ登竜門として西の U-35 に対して、東の SD レビューがありますが、そちらはある程度完成されたプロジェクトが選ばれます。それに対して U-35 は選出の幅が広く、“こんなのもありなのか？”という人も選ばれているように感じます。本展に期待しているのは、思ってもみなかった価値観で、こちら側の概念を変えるほどの体験をさせてくれることを望んでいる。建築への強い向上心や、何かを渇望する気持ちを持つ、そんな気概ある方にぜひ応募してほしいと思います。

――― それでは時間となりました。4 時間余りのシンポジウムに続いて本会議にもご出席いただき、貴重なご意見を賜りましたことに心より感謝申し上げます。

一同：ありがとうございました！（拍手）

2025 年 10 月 18 日

大阪・梅田 グランフロント大阪　北館 4 階 ナレッジシアター・控室

U-35 2025シンポジウム会場の様子